

ISSN 1881 - 980X

日本科学教育学会

Japan Society for Science Education

発行：吉田 淳

事務局：愛知教育大学理科教育講座 内

URL：<http://www.jsse.jp>

.....
2010.2.15

NO.196
.....

科学教育研究レター



目 次

- | | |
|---|--|
| ■ 年会
第34回年会開催案内（第3次）.....2 | ■ 2010年度学会賞候補者の募集6 |
| ■ 若手の会3 | ■ 編集理事会だより7 |
| ■ 研究会・支部だより
平成21年度 第3回研究会・
南関東支部会のご案内4
平成21年度 第4回研究会・
北陸甲信越支部会のご案内6 | ■ 会員の声
「言語学的相対化」と「比較科学論」
日本科学教育学会学術賞を受賞して8 |
| | ■ 国際交流委員会だより9 |
| | ■ 広報委員会からのお知らせ10 |

第 34 回年会 開催案内 (第 3 次)

1. 年会テーマ：次世代の科学力を育てる（現在、サブタイトルを検討中です）
2. 日程：平成 22（2010）年 9 月 11 日（土）～ 12 日（日）
※ 9 月 10 日（金）には各種委員会・会合等が実施される予定です。
3. 会場：広島大学（東広島キャンパス：教育学研究科、学士会館）
（〒 739-8524 東広島市鏡山 1-1-1）
・アクセス方法
JR 西条駅前からバス「広島大学」行に乗り、「広大北口」で下車。
（所要時間約 20 分、詳細は下記 URL 参照）
<http://www.hiroshima-u.ac.jp/top/access/index.html>
4. 主催：日本科学教育学会（後援：未定）
5. 年会実行委員会：
[委員長] 岩崎秀樹（広島大学）
[委員] 磯崎哲夫、小山正孝、清水欽也、馬場卓也、山口武志、木下博義、松浦拓也
6. 連絡先：〒 739-8524 東広島市鏡山 1-1-1
広島大学大学院教育学研究科
岩崎秀樹 E-mail: jsse34@hiroshima-u.ac.jp
7. 内容：次の内容を予定しています。（決定次第、年会ホームページに掲載します）
 - (1) シンポジウム：現在検討中です。
 - (2) 招待講演『科学教育研究セミナー』：特定の分野でアクティブに研究を進めている先生方をお招きし、会員向けに専門的なお話を聞かせて頂く招待講演です。第 34 回年会においても、通例通り、日本科学教育学会論文賞受賞者をお招きする予定です。
 - (3) 学会企画課題研究発表：昨年度の継続を含めて数件の発表を予定しています。
 - (4) 公募企画：①自主企画課題研究発表、②一般研究発表、③インタラクティブセッション。
 - (5) その他の企画：①総会、②懇親会、③若手の会、④各種会合等。
※ワークショップについて：日程、設備等の諸条件を検討した結果、第 34 回年会では、第 33 回年会同様、ワークショップは実施しないこととしました。
8. 企画募集予定（年会 Web に詳細を掲載します）
 - (1) 自主企画課題研究発表：特定のテーマについて徹底的に議論できる場です。
 - ・一次受付締切：平成 22 年 3 月 13 日（土）（オーガナイザー → 年会企画委員会）
 - ・企画受付締切：平成 22 年 4 月 6 日（火）（オーガナイザー → 年会企画委員会）
 - ・受理審議期間：平成 22 年 4 月 7 日（水）～ 4 月 12 日（月）（年会企画委員会）
 - ・審議結果報告：平成 22 年 4 月 14 日（水）（年会企画委員会 → オーガナイザー）
 - ・発表者の最終確定：平成 22 年 5 月 14 日（金）（オーガナイザー → 年会企画委員会）
 - ・原稿締切：平成 22 年 6 月 14 日（月）（オーガナイザー → 年会企画委員会）
 - (2) 一般研究発表
 - ・発表申込みと原稿受付期間：平成 22 年 5 月 24 日（月）～ 6 月 13 日（日）
 - ・原稿締切：平成 22 年 6 月 13 日（日）

(3) インタラクティブセッション

ポスター発表もしくは実演紹介の形態で、研究内容についてインタラクティブにじっくりと語り合う場です。セッションは60分程度の時間を予定しています。

- ・発表申込みと原稿受付期間：平成22年5月24日（月）～6月13日（日）
- ・原稿締切：平成22年6月13日（日）
- ・申し込みおよび原稿提出先：jsse-interactive@freeml.com
- ・原稿の形式は、一般発表に準じます。年会論文集執筆にあたっての留意事項をお読み下さい。

※原稿を提出する際には、メールに、テーマ名、担当者名、概要、連絡先をお知らせ下さい。また、インターネット利用の有無、電源利用の有無、その他の希望についても明記してください。

若手の会

【第34回年会（広島大会）での会合】

年会の前日（9/10（金））の夜に、昨年同様、若手同士のネットワークづくりを目的として、お互いの興味・関心や今後の展望を語るという会合を予定しています。

現在、年会企画委員会で検討を進めています。詳細が決まりましたら、学会レター、年会ホームページ、メーリングリストなどでお知らせいたします。お楽しみに。

【若手の会メーリングリストのご案内】

JSSE若手の会では、山形大学の加納寛子先生のご支援により、メーリングリストを立ち上げています（加納先生、ありがとうございます）。参加者のみなさんで相互に、国際会議、新刊案内、求人など、研究情報を交換しています。

参加をご希望される方は、下記の要領でご連絡ください。

- ・申込先アドレス（加納先生）：kanoh@abd.kj.yamagata-u.ac.jp
- ・件名：科学教育学会若手の会 ML 登録希望

また、登録アドレスの変更または削除についても、必ず上記加納先生宛にご連絡ください。よろしくお願いいたします。

■第34回年会「若手の会」企画担当委員

青山和裕（愛知教育大学）	kaoyama@aeu.ec.aichi-edu.ac.jp
松浦拓也（広島大学）	takuyam@hiroshima-u.ac.jp
三宅志穂（神戸女学院大学）	miyake@mail.kobe-c.ac.jp
山口悦司（宮崎大学）	etuji@cc.miyazaki-u.ac.jp

平成 21 年度 第 3 回研究会・南関東支部会のご案内

日本科学教育学会南関東支部では、平成 21 年度第 3 回日本科学教育学会研究会・南関東支部会を以下のテーマと日程で行います。どなたでもご参加いただけますので、皆さまのご参加をお待ちいたしております。

[テーマ] **実社会・実生活との関連を重視した科学教育**

[主催] 日本科学教育学会南関東支部

[後援] 相模原市教育委員会

[日時] 平成 22 年 2 月 20 日 (土) 10:00 ~ 16:40

[会場] 麻布大学 獣医学部棟 7 階会議室

〒229-8501 神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71 (JR 横浜線・矢部駅より徒歩 4 分)

[担当] 岡本弥彦・福井智紀 (麻布大学)

[連絡・問い合わせ先]

〒229-8501 神奈川県相模原市淵野辺 1-17-71

麻布大学 生命・環境科学部 TEL(直通) & FAX 042-769-2524 (福井智紀)

E-mail fukui@azabu-u.ac.jp (福井智紀)

[参加] 発表の有無にかかわらず参加できます。学会員でない方も参加できます。

[参加費] 学会員は無料、学会員でない方は 500 円です。ただし、相模原市内の学校関係者は無料です。

[日程]

10:00 - 10:45	受付
10:45 - 11:00	開会
11:00 - 12:20	研究発表 (午前の部)
12:20 - 13:20	昼休憩・支部懇談会
13:20 - 14:40	研究発表 (午後の部)
14:40 - 15:00	休憩
15:00 - 16:30	特別講演 太田光明先生 (麻布大学獣医学部教授)
16:30 - 16:40	閉会

《研究発表 (午前の部)》

A 会場 座長：藤田剛志 (千葉大学)

A 01 11:00 - 11:20 実社会・実生活との関連を重視した総合的な理科教育「アースシステム教育」

五島政一 (国立教育政策研究所)

A 02 11:20 - 11:40 理科授業における日常生活との関連 (1) —国際比較調査の結果から—

○松原憲治・猿田祐嗣 (国立教育政策研究所)

A 03 11:40 - 12:00 実験とものづくりを通して科学的リテラシーを育成する歩行モデル教材開発

○中澤 剛・松原雅昭・三田純義・斉藤勝男 (群馬大学)

A 04 12:00 - 12:20 PISA 型学力を育てる教材開発事例「にわたりのたまごの重さはみんな同じか」

須田良子 (神奈川県高座郡寒川町立旭小学校)

B会場 座長：岩本 泰（東海大学）

B 01 11：00－11：20 教材イラストの利用形態と期待される効果

○小松幸廣（国立教育政策研究所）・松田知子（相模原市教育委員会）

B 02 11：20－11：40 体験的なオゾン層と紫外線の科学の指導

坪田幸政（桜美林大学）

B 03 11：40－12：00 理科授業の社会的構築場面における子どもの学習意図の分析－中学校理科雲発生のメカニズムの学習を事例として－

○甲斐初美（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所）・森本信也（横浜国立大学教育人間科学部）

B 04 12：00－12：20 科学概念構築における自覚性と随意性に寄与するメタファーの機能

○齋藤裕一郎（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所）・黒田篤志（横浜市立井土ヶ谷小学校）・森本信也（横浜国立大学教育人間科学部）

《研究発表（午後の部）》

A会場 座長：中澤 剛（群馬大学）

A 05 13：20－13：40 「自然のパターン」の把握を取り入れた環境学習の工夫

○岡本弥彦（麻布大学）・下野 洋・坂上寛一（星槎大学）・小椋郁夫（岐阜県伊自良青少年の家）

A 06 13：40－14：00 理科学習の有用性の認知と学習意欲の志向性との関連に関する実証的研究

藤田剛志（千葉大学教育学部）

A 07 14：00－14：20 フィリピンの小学校理科におけるハンズ・オン教材の開発と実践

オヤオ シェラ ガムト（千葉大学大学院人文社会科学研究所）

A 08 14：20－14：40 韓国の新しい理科学習指導要領の特徴（I）

孔 泳泰（晋州教育大学校科学教育科）

B会場 座長：坪田幸政（桜美林大学）

B 05 13：20－13：40 高校物理における思考力・判断力・表現力の育成を志向した理科授業とその評価規準の作成

○豊田光乃（かえつ有明中・高等学校）・森本信也（横浜国立大学教育人間科学部）

B 06 14：00－14：20 「留意点系統図」に基づく科学概念の習得と活用－基本的な物質概念の形成の視点から－

森本信也（横浜国立大学教育人間科学部）・○平瀬健太郎（横浜国立大学大学院教育学研究所）

B 07 14：00－14：20 質量保存概念を事例とした子どもの理科学習状況調査

森本信也（横浜国立大学教育人間科学部）・○諸田祐樹（横浜国立大学大学院教育学研究所）

B 08 14：20－14：40 子どものイメージから構想する「音」についての科学概念形成とその理科学習論的考察

森本信也（横浜国立大学教育人間科学部）・○三宅勇輝（横浜国立大学大学院教育学研究所）

《特別講演》 15：00～16：30

「アニマルセラピーの科学的根拠と小学校における実践」

太田光明先生（麻布大学獣医学部教授 介在動物学研究室）

アニマルセラピーとは、動物を介在して人の心身の健康回復や子どもたちの養育を行う実践的な行為全般を言う。欧米諸国での普及に比べ、わが国の遅れは致命的な状態と言ってもよい。そこには、欧米の実利主義に対して、道理を求める日本人の気質がある。しかし、アニマルセラピーには、動物の何が、どのように影響を及ぼすか、について科学的な根拠がある。子どもたちに対する内外の実践とともに紹介したい。

（参考 URL：麻布大学介在動物学研究室 <http://ohta-lab.ercaz.jp/>）

平成 21 年度 第 4 回研究会・北陸甲信越支部会のご案内

科学教育に関わる教師の指導力向上は不易の課題です。近年、日本科学技術振興機構 (JST) の理数系教員 (コア・サイエンス・ティーチャー) 養成拠点構築事業等にみられるように、その重要性と期待は益々高まっているといえます。

このような状況の中で、学校現場・教育委員会・大学等がどのような連携をとり、どのような手だてを講ずれば教員の指導力が向上し、児童生徒の学力が高まるのかについて、技術・数学・理科等の教科や総合的な学習の時間、ICT 等の活用とを関連づけて、総合的・多面的に議論を深めたいと思います。

つきましては、下記の要領で研究発表を募集しますので、多数の方々の申込をお待ちしております。

[テーマ] 科学教育に関わる教師の指導力向上の方策を探る

[主催] 日本科学教育学会、日本科学教育学会北陸・甲信越支部、上越教育大学

[後援] 新潟県教育委員会 (予定)、上越市教育委員会 (予定)、妙高市教育委員会 (予定)、糸魚川市教育委員会 (予定)

[日時] 2010 年 5 月 29 日 (土) 10:00 ~ 16:00

[会場] 上越教育大学

[対象] 会員、教員、学生、社会人

[参加費] 無料 (発表の有無にかかわらず参加できます。会員でない方もご参加いただけます。)

申込締め切り : 2010 年 4 月 9 日 (金)

申込時には、発表者名、所属、発表タイトル、連絡先、使用機器をご連絡ください。

発表原稿の締め切り : 2010 年 4 月 23 日 (金)

申込及び発表原稿送付 (連絡先) : 上越教育大学

Tel: 025-521-3440 E-Mail: kubota@juen.ac.jp

〒 943-8512 新潟県上越市山屋敷町 1 番地

上越教育大学 久保田善彦

2010 年度学会賞候補者の募集

本学会の学会賞 : 学会賞 (大塚賞)、学術賞、国際貢献賞、論文賞、奨励賞及び教育実践賞を下記により募集します。すべての賞は会員からの推薦に基づいて審査されますので、ご活躍の候補者について、多数の推薦をお願い致します。

1. 推薦期限

2010 年 (平成 22 年) 5 月 24 日 (月) (必着)

2. 受賞資格

(1) 学会賞 (大塚賞) : 科学教育に対する優れた業績や功績によって本学会の発展に寄与した本会会員。

(2) 学術賞 : 科学教育において先導的・開拓的な業績や功績を挙げ、本学会の発展に寄与した本会会員。対象となる業績や功績は、賞の応募締切日から過去 10 年以内のものとする。

(3) 国際貢献賞 : 科学教育の国際貢献・国際協力研究において特に顕著な業績や功績のあった本会会員。対象となる業績や功績は、賞の応募締切日から過去 5 年以内のものとする。

- (4) 論文賞：科学教育に関する優れた研究を行い、その成果を本学会の「科学教育研究」誌に発表した本学会会員。対象となる論文は、賞の応募締切日から過去3年以内に発表されたものとする。
- (5) 奨励賞：科学教育に関する優れた研究を行い、その成果を本学会の「科学教育研究」誌、年会論文集、研究会「研究報告」に発表した本学会会員で、受理の時点で、原則として満38歳未満の者。対象となる論文等は、賞の応募締切日から過去2年以内に発表されたものとする。
- (6) 教育実践賞：科学教育の実践研究において特に顕著な業績や功績のあった本学会会員。また、該当する本学会会員との連携により、科学教育に従事し、教育上顕著な業績や功績のあったグループ。対象となる業績や功績は、賞の応募締切日から過去3年以内のものとする。

3. 受賞件数

大塚賞、学術賞及び国際貢献賞の件数はとくに定めない。論文賞、奨励賞及び教育実践賞の件数は2件以内である。

4. 選考

本学会の学会賞選考委員会が候補者を選定し、理事会が決定する。

5. 賞

- (1) 本賞は賞状とする。
- (2) 賞の贈呈は、2010年度定時総会において行う。

6. 候補者の推薦

- (1) 候補者を推薦する者は、本学会の会員とする。大塚賞は他薦のみによるが、その他の賞は自薦も可とする。
- (2) 推薦者は、推薦の様式を学会ホームページ（「各種書式」からダウンロードできます）で入手の上、その様式にしたがって作成した推薦書を日本科学教育学会事務支局に提出する。
- (3) 奨励賞の推薦に当たり、論文などの著者が複数の場合は、受賞候補者は主著者となるため、他の全著者の承認が必要となる。この承認は、推薦者において予め得ておくものとする。

7. その他

- (1) 論文賞対象論文は、「科学教育研究」Vol.31, No.2以降に掲載の論文です。また、奨励賞の対象は、「科学教育研究」Vol.32, No.2以降、研究会「研究報告」Vol.22, No.4以降及び第32回・第33回年会論文集に掲載の論文が該当します。

編集理事会だより

前回（平成21年11月21日）以降、この間、編集理事会は開催されていませんので「科学教育研究」編集状況の報告のみいたします。

査読状況

1. 新規投稿論文（2009.11.13～2010.1.28）：13篇（内訳：和文12篇、英文1篇）
2. 査読中論文（1月28日現在）：27篇（内訳：7篇：1回目、7篇：再投稿待ち、9篇：2回目、2篇：査読員選定中、1篇：担当編集委員による総合判定中（1回目）、1篇：担当編集委員による総合判定中（2回目））
3. 掲載決定論文（1月28日現在）：5篇（内訳：研究論文5篇、（34-1：4篇、34-2：1篇））

なお、平成21年度第2回編集理事会は、平成22年3月13日（土）に開催を予定しています。

科学教育研究」投稿状況および掲載決定状況（平成22年1月28日現在）

	新規投稿論文数（篇）		審査中（篇）		掲載決定論文数（掲載号）		招待論文数（掲載号）		掲載不可論文数	
	和文	英文	和文	英文	和文	英文	和文	英文	掲載不可	辞退
2009年 1月	6	2			1 (32-4)		2 (32-4)		1	
2月	5		22	4	1 (32-4) 1 (33-2)	1 (33-2)	6 (32-4)		7	
3月	5		21	4	2 (33-2)		5 (32-4) 2 (33-1)		1	1
4月		1	16	4	4 (33-2)				1	
5月	6		17	4	1 (33-3)	1 (33-3)			3	
6月	6		22	1	3 (33-3)	2 (33-3)			1	
7月	1		14		4 (33-3)				5	
8月	6	1	19	1	1 (33-3)					
9月	6		18		3 (33-4)				3	1
10月	24		34		4 (33-4)				5	
11月	6	1	30	1					9	
12月	3		25	1	4 (34-1) 1 (34-2)				4	
2010年 1月	6		26	1	1 (34-1)				2	1

会員の声

第33回定時総会において学術賞を受賞された川崎先生に、本欄へ寄稿していただきました。

「言語学的相対化」と「比較科学論」

日本科学教育学会学術賞を受賞して

川崎 謙（高知大学教育学部）

去る8月25日、同志社女子大学今出川キャンパスに於いて開催された第33回年会総会の場において日本科学教育学会学術賞を頂きました。あまり華やかとはいえない私の仕事に、「先駆的・開拓的な業績」という評価を頂いたことは、これから我が国の科学教育学研究の裾野を広げようと志す若い方々の励みになるかもしれないと喜んでおります。

今回の学術賞は、「科学教育における言語学的相対化と比較科学論の構築」について私の業績を認めて下さったものです。せめてもの感謝のしるしとして、馴染みが薄いだらうと思われる「言語学的相対化」と「比較科学論」について、高知大学教育学部附属小学校理科部の協力を得て最近行った実践を例に簡単な説明を試みます。これを機会に、興味を持って頂ければ幸いです。

学習指導要領によれば、五年生の理科B区分の内容として「魚には雌雄があり…」が挙げられているのはご承知の通りです。この学習においてはメダカが教材としてよく使われ、その授業では児童や教師は「メダカ」という言葉を幾度も発声します。この時、理科の目標の最後の

部分である「科学的な見方や考え方を養う」という目的に適うように、教師は「メダカ」と発声できているか、できていなければどのように解決法を探ればいいのかというのが、「言語学的相対化」に係わる問題提起の一例です。

この問題提起には、少しばかり補足が必要でしょう。教材としての「メダカ」は、英語では (Japanese) killifish といいます。この可算名詞は単複同形で使うこともありますが、語尾に -es を付けて複数を表すこともあります。ここでは分かりやすいように、語尾に -es を付けて複数を表すことにします。問題はここからです。もしこの授業が英語文化圏で行われるとすれば (そのような授業が現実存在しているかどうかは問題ではありません)、教師は以下の五つの場合から最も適切な killifish の形を選んで口にしなければなりません。それらの五つとは、killifish、a killifish、killifishes、the killifish、the killifishes の五つです。

この区別は、イデア界と物質界を峻別する二項対立的世界観に対応しています。いうまでもなくこの峻別、「科学的な見方や考え方」の基盤です。文脈に強く依存しますが、イデア界に純粋に対応するのが the killifish、抽象化の度合いを反映しつつ物質界に対応するのが the killifish も含む上の五つの形です。対照的に日本語を教授言語とする理科の授業においては、「メダカ」という表現一つです。これでは、二項対立的世界観に基づく相違を形の上から認識させることはできません。この言語的事実は、理科の教授言語が日本語であることに基づく科学概念形成上の障害といえましょう。

これを克服するための工夫が、児童が「メダカ」と口にする度に、「そのメダカは目の前のピーカーの中いるメダカのこと、それともクラス全体のメダカのこと、それともメダカ全体のこと」という教師の発問でした。この発問の目的は、単に「メダカ」といっても抽象化の度合いに差があって、それに応じて私たちの思考が進められていることに気づく基盤を整えることです。

児童の内容理解という観点からすれば、この工夫が即効性はありません。しかし大変興味深いのは、この授業を担当した教師が「メダカについて今自分が何を言いたいのかが大変よく分かった」との感想を持ち、「科学的な見方や考え方」について理解を深めたことです。これは科学教育を教授言語と関連付けて考察する視点の樹立であり、科学教育についての「言語学的相対化」を達成したことを意味しています。

この簡単な考察からもう一つ分かるのは、「日本の児童は、理科の授業において異なる二つの世界観に無防備に曝されている」ということです。一方は「メダカ」を二項対立的世界観に従って使い分ける科学的世界観であり、他方は区別しない日本語に織り込まれた世界観です。理科において、これら二つの世界観をうまく取り扱うための視点を提供するのが科学教育学における「比較科学論」の役割です。

最近、「言語学的相対化」と「比較科学論」について纏めた論考を公にしました。以下に書誌情報を記しますので、ご参照いただければ幸いです。なお、一般的な読者を想定した書物も講談社選書メチエの一冊として公にしております。こちらの方もご覧ください。

最後に、学術賞を頂いたことについて再度お礼申し上げます。有難うございました。

- ・ Kawasaki, K. (2009): "Any Language Can Be the Medium of Instruction of School Science, But..." in ed. by Yew-Jin Lee, *Science Education Research in Asia*, Amsterdam/Taipei: SENSE Publishers, pp.203-219.
- ・ 川崎 謙 (2005)『神と自然の科学史』(講談社選書メチエ) 講談社。

国際交流委員会だより

第33回年会(2009.8.25)において、「世界に発信したい日本の科学教育」をテーマに、国際交流委員会企画のシンポジウムを50名以上の参加を得て開催した。

まず担当理事の小倉が、テーマ設定の理由として、これまで海外の科学教育を国内で紹介する取り組みは多くなされてきた一方で、日本の科学教育を海外で紹介しようとする取り組みが乏しく、海外の教育関係者の関心も高いことから、世界に発信すべき日本の科学教育とは何かを議論し再認識する場として本シンポジウムを企画したと説明した。

続いて、「ESD の実践から学ぶこと：多様性と持続可能性」北原和夫氏（国際基督教大学）、「日本の科学教育研究が国際的な研究共同体に貢献できるためには」小川正賢氏（東京理科大学大学院科学教育研究科）、「科学を文化として社会に浸透させるために」渡辺政隆氏（（独）科学技術振興機構）、「政策としての科学技術人材育成」岩淵晴行氏（（独）科学技術振興機構）、「日本の科学教育実践技術」滝川洋二氏（東京大学）の5氏から提案していただいた。

北原氏は、南アフリカ共和国とのESDのためのモジュール共同開発プロジェクトを通じて、ローカルな課題からグローバルな持続性を見出したり、ICTを活用して両国の子どもたちが知識、経験、ビジョンを共有できるなど、日本がイニシャティブを発揮して国際的な科学教育開発を進展できる可能性について紹介された。

小川氏は、英・米・加・豪を中心とする欧米の科学教育研究者共同体が世界を席卷する現状に対して、グローバル化に対抗する機軸としてRegionalな学術団体や学術誌の発展や科学教育の「ローカル化」「多様化」への着目も含めて、日本の科学教育をとことん解読したり、未来社会のビジョンと連動した科学教育像を提示する重要性などを強調された。

渡辺氏は、日本でサイエンスコミュニケーション活動が普及し、科学が文化として社会に浸透しつつあること、現在サイエンスカフェや日本的な井戸端会議モデルが広がりつつあること、科学コミュニケーションとしての教師の育成が必要なこと、及びサイエンスアゴラの意義や可能性について紹介された。

岩淵氏は、日本の科学技術政策と科学技術人材育成施策との関係について説明され、科学技術振興機構（JST）に設置された理科教育支援センターの目的と活動の内容、今後の主要な課題などを紹介された。

滝川氏は、世界の教育が欧米の先進国による発信で大きく動いている中で、日本の科学教育実践技術である仮説実験授業や玉田方式など民間で発展してきた教育研究が国際的にも水準が高いこと、NPO 法人ガリレオ工房や青少年のための科学の祭典などの活動を通じて日本独自に優れた実験や探究の教育方法が開発されてきたことなどを紹介された。

今回のシンポジウムで、日本の科学教育には世界に発信すべきさまざまな価値が蓄積されていることが再認識できた。今後、日本科学教育学会がイニシャティブの一端を担い、これらの価値を人類共通の財産にできるよう積極的に活動を展開していくことが重要であると実感した。

（担当理事 小倉、美馬）

広報委員会からのお知らせ

科学教育研究レター第196号をお送りいたします。お気づきの点などございましたら、学会webサイトにある「お問い合わせ」（webメール）をご利用のうえ、お知らせください。

担当理事：東原義訓（信州大） 荻原 彰（三重大）
委 員：加藤久恵（兵庫教育大） 二宮裕之（埼玉大） 土田 理（鹿児島大学）
藤岡達也（上越教育大） 渡辺政隆（科学技術振興機構）
小倉 康（国立教育政策研） 久保田善彦（上越教育大）
幹 事：福井智紀（麻布大） 茅野公穂（信州大）

科学教育研究レター 編集・印刷

日本科学教育学会広報委員会

日本科学教育学会

Japan Society for Science Education

URL : <http://www.jsse.jp>

□事務局 愛知教育大学 理科教育講座 内

□事務支局（入退会・会費・学会誌発送関連） TEL : 075-415-3661 FAX : 075-415-3662

E-mail : jsse@nacos.com

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル

□編集事務局（論文投稿・査読編集） TEL : 075-415-3155 FAX : 075-417-2050

E-mail : jsse-hen@nacos.com

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル

郵便振替口座：00170-6-85183 日本科学教育学会

銀行口座：みずほ銀行 京都中央支店 普通 2269008 日本科学教育学会